

The **SPECIAL** *Real* **INTERVIEW** Face

役者

ただのモノ

やってないときは、

俳優・市村正親



取材／文 あさかよしこ
写真 ハリー中西
取材協力 都ホテル大阪・平岡企画

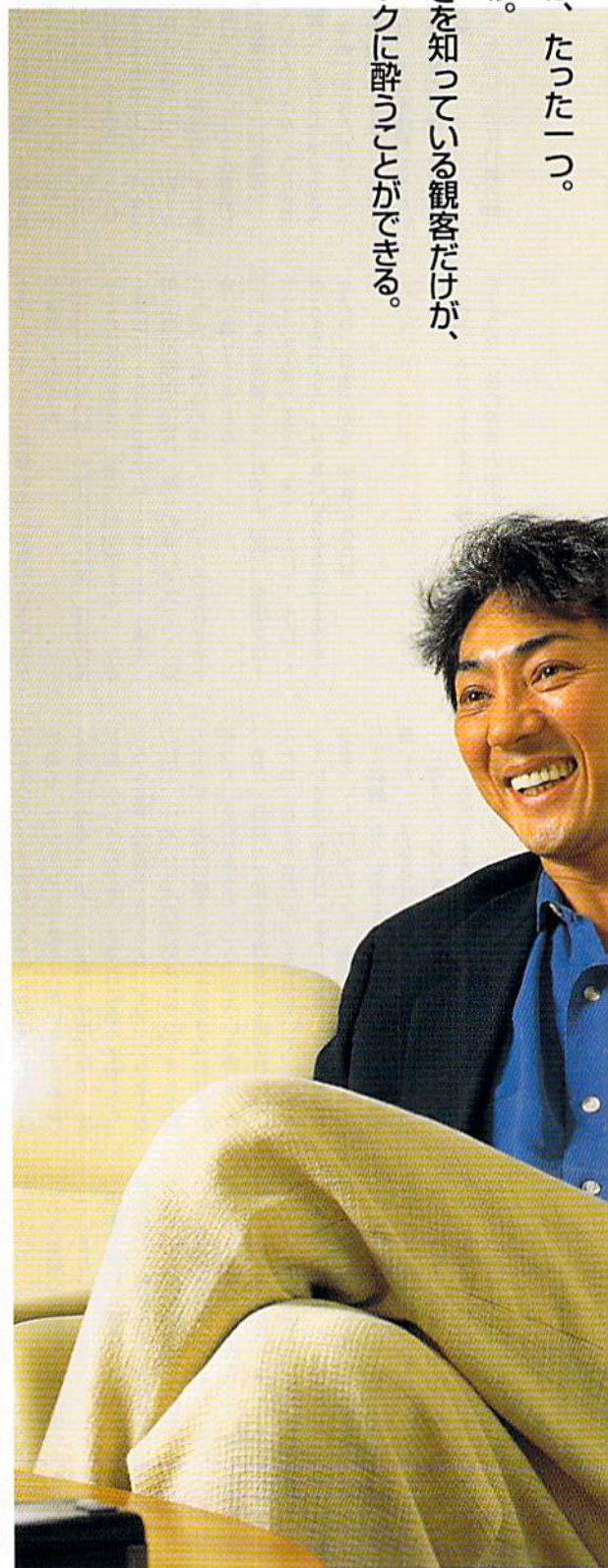
彼のすごさを確認する方法は、たった一つ。

劇場に出掛けて行くことだけ。

一瞬で消える、生ものの良さを知っている観客だけが、

彼の仕掛ける、芝居のマジックに酔いどれになる。

なんとも罪作りな男である。



陥りやすいワナが見える

インディアン島と呼ばれる孤島の、謎の屋敷に閉じこめられた10人の男女が、童話の歌謡どおり、一人また一人と殺されていく…。

ミステリーの女王アガサ・クリステリーの最高傑作といわれる『そして誰もいなくなった』が、この夏、近鉄劇場のオリジナル製作作品として上演された。主演は、冒険家の青年ロンバートに扮する市村正親。

切れのいい演技、鮮やかな身のこなし、陰影を含んだ独特のマスクが、時にはちょっといいかわしい伊達男風に、時には少年のように、持ち前の年令不詳の妖しさを、ここでも十分に発揮して、ミステリーの効果を際立たせてくれる。「この間45になりましたよ。四捨五入したら50だよ(笑)」

存在そのものが、すでにミステリアスな人である。18年間、常にスターとして在籍した「劇団四季」を離れて4年。

素人目でみて、四季時代、彼が出演して話題

になった作品は、今ざっと思いつくだけでも「ウェストサイド物語」「コーラスライン」「キャッツ」「オペラ座の怪人」「エクウス」「カッコウの巣をこえて」「エレファントマン」「M・バターフライ」と、実に実に華やかである。第一線をヒラヒラりと昇り詰めて、ついに頂点を極めてしまったかのようにも見えたけれども…。

「ひとつの劇団にいると、役が限定されてくる、新作がない、ということにぶつかりますね。かつて演じたものを、くりかえし演じるのも一つの方法だけれども、役者として一回しかない人生だつたらば、思い切りいろんなものと出会ってみたい。いろんな素材の演出家、俳優さんと出会うことで、自分の持っている色とか、体質みたいなものに磨きかけた。たとえば、これまで芝居を通じて僕の中にあるもの…化け物やって、ホモやって、障害者やって、少年やって、という部分、外にはそういうものが、まだまだいっぱいあるわけですね。そんな新しいものとの出会いがあるということが、これまでどの一番大きな違いですね。」

退団後半年間、彼は、徹底的に芝居を観ることに専念したという。

「ひとの芝居をみると、全部自分にかえってくるんですよ。クサイ部分、いい部分、イヤな部分、スケベな部分なんか、ゼーンブ見えてくるのね。それを見ることによって、役者として陥りやすいワナとかね、そういうものを自分で発見していくわけです」

なるほどフリーになってからの市村正親の舞台には、目を見張るようなスケールの大きさと共に、小気味良いまでの柔軟さが加わった。

一昨年の4月に初日を迎え、昨年の9月まで、実に1年5カ月にわたる超ロングラン公演となったミュージカル「ミス・サイゴン」は彼の代表作の一つになるはずである。そして、「6月に帝劇で、はじめて僕は「お夏狂乱」というマゲ物を演じたのね。その延長上に、これから演りたいものがいっぱいあるわけ。たとえば「雪之丞変化」。ネッターピッターでしょう? (笑) オレ、よく考えたら「ラ・カージュ・オ・フオール」とか「M・バターフライ」で女装やったりしてるから、これ、おもしろいんじゃないかと思って。それから、三好十郎の「炎の人」とか、村山和

義の「国定忠治」。これは「赤城の山も」の新国劇の忠治じゃなくなって、女に弱くて意気地がなくて休んでないけど、これじゃますます休めないネ(笑)。

歪みのある人間にこそ、ドラマがある。

大阪・神戸・大津と、関西でも舞台の観客動員数が、女性を中心に驚くほどの伸びを見せている中で、なぜか京都は演劇に対する興味がいま一つ希薄である。「どうしてかなあ。劇場がないからかな」アイスコーヒーの氷を、ストロウでカラカラいわせながら首をかしげる。「暑いからかな(笑)。冬は寒いし…。そうだね、きっと自然体でいるような、いつも何かを演じているような、不思議な人である。」

「みんな勝手に僕のイメージつくっちゃうんだよね。市村さんって、神経質で暗そうだって…。合ってるっていうんだヨ! (爆笑) 暗くて神経質ですヨ! (笑) 僕の場合、どうしても役柄



として化け物シリーズとか、奇形シリーズとかが多いから、よけいそうなんだね」
 「コーラスライン」ではホモセクシャルの青年ポール、「オペラ座の怪人」では、顔に火傷を負った怪人と呼ばれる男、「エレファントマン」では、奇形に生まれついた心優しいジョン、「カッコーの巣をこえ」では狂人、「エクウス」では、愛馬に異常な執着をみせる少年、「M・バタフライ」では、謎の中国人女優、「ラ・カージュ・オ・フォル」では、ゲイを商売にする女装の男…と、彼の舞台は、アブノーマルを演じる時に、よりその魅力が際立って、印象深い。「アブノーマルな役っていうんじゃないんだよね。そういう歪みのある人間に、よりドラマがあるってことだと思っけど。真剣に生きたがゆえに不幸を背負ってしまう。究極の愛を生きようとする。だから演じる役者は、それを理解するといふより、演じてる2時間3時間の間、そういう風に生きればいいんだね」
 彼が最後に「エクウス」を演じたのは41歳の時。

公演中、舞台の上を、17歳の自閉症の少年として生き抜いたことになる。男でもない、女でもない、大人でも、子供でもない、彼の独特のしなやかさを、その素顔の中にも見つけることができるのだろうか。
 「役者やってない時？ただのモノ（笑）役者の役をどればただのモノ（者）。何物でもない。だから普段は、こーやって、ドレーダラツ（爆笑）埼玉県川越市の出身。彫りの深いマスクで、知らんぷりを決めれば、ニューヨーク生まれでも十分に通りそうである。
 「だったら英語しゃべれるよ（笑）。今頃ブロードウェイで演ってるよ、ネッ。だけど…ブロードウェイだったら、こんなにいるんな役できなかつたよね。日本だから、できたんだね。」

あの花はなにかの前触れ？

スポットライトのまわり輪の中で産声をあげたような、彼の役者人生の中にも、シリアスな

歴史がある。舞台芸術学院に在学中、特別講師として指導にあたった俳優西村晃との出会いを得て、卒業後3年間、付き人を務めている。「付き人やっておもしろかったのは、1年目は好奇心。アツテレビで見た人がいるツとかね。2年目になると、少しずつ自分が出て来て、反抗期っていうのかな。3年目になってやっと、いろんな事が理解できてくる。インソップかなんかの話で、一本の丸太の両側からやってきた2匹のヤギが、お互い譲らないで角突き合わせているっていうのがあるでしょう。そういう時は、こっちが一旦戻って相手を渡らせてあげればいいんだね。自分が自分がついて思わないで、相手がついていう風に思えば、まわりも先生も、自分もうまくいくということも、解るようになった」そして24歳になったある日、彼は西村氏に手紙を書いた。「3年お仕えて、そろそろ自分を第一に考えたくまりました。って。そしたら、「いいよ、お前がそういう気持ちになった事は非常にうれしいよ」って言ってくれました。その時亡

くなった奥様から言われた事は、「どんなことがあっても、正道を歩きなさい」ということ。その正道っていうことは、あとになって解ることなんだけど」
 この3年間の経験が、今の彼の大きな支えになっているという。
 「四季で浅利（慶太）さんに、しこかれて、たかかれて、刻まれて、それを通り抜けたら、フリーになってこまでやれたのも、あの3年間の生活があったから、そしてそれは、もの事をそういう風に考えられるように育ててくれた親のおかげでもあると思うね」
 その後、舞台俳優として大きく成長した彼と西村氏との間には、ちょっとしたいいエピソードがある。「ミス・サイゴン」の楽屋に、ある時西村氏から、お花の代わりに姫リンゴの鉢が届いた。「こんなかわいい実がなっている。そのあと何日かしたら、花が咲きはじめてね。ふつう花が咲いてから実がなるでしょう。不思議なこともあるんだなあって、写真撮ったりしていたら、

市村正親



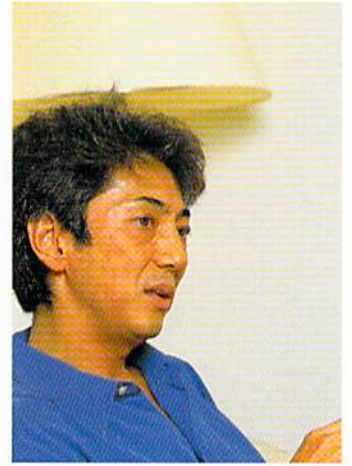
芸術祭の優秀賞の内示をいただいたの。あの花は何かの前触れだったんだね」
それからしばらくして、彼は、TVの水戸黄門シリーズを勇退した西村氏、ひさびさの舞台出演の楽屋を訪れた。手に千足屋で買った大きなリングを携えて。「それでね、「先生、この間のリングが、こんなに大きくなりました」って言ったんだ。そして、シャレだっすぐに解って来て「このヤロー」ってね。これ結構ナイスジョークだったの(笑)」

彼の思いつきも鮮やかだけれども、西村氏の受け止め方もまた、粹である。
正道の意味も、今ならわかる。
「結局よけいな事はするなって事だと思っね。オレにとっては正道は舞台なんだ。今のところ、それは守れてる」

自分の顔、アップで見たくないよね。
自分は映像向きではないと言う。

「おもしろいかもしれないけど、やっぱりね、こっちの方がいっちゃうと、舞台の上のオレについているものが、なくなっちゃうような気がする。それに…自分の顔アップで見たくない(笑)。ヤダネ、くどくて(笑)」
どこか、沢田研二・カールスモーキー石井に通じる美貌の持ち主である。
「やめてヨオ(笑)。沢田研二は沢田研二、カールスモーキー石井はカールスモーキー石井、ボクはボクなのッ」

ちよっと凄味のある目で睨まれてしまった。この目のアップを映像で見てみたい気がするのだけれども…。「映画とかテレビっていうのは、ある程度編集する側のものでしょう。舞台は板の上になれば、役者のものになる。それにNGもカット割りも効かない生ものの良さ。舞台の醍醐味はこの一瞬で消える良さだと思うのね。その時期に生きていないと出会えない良さ。だからこっちも、身を削って、その時々芝居に魂を置いていけるんだと思うね」



オリンピックには魔物が住んでいるという。舞台にも魔物はいるのだろうか。
「魔物がいる舞台は最高だね。なんにも無い舞台もあるでしょう？そういうのはジャマモノっていうんだ（爆笑）」
魔物を感じたことは？
「オレは結構魔物みたいな芝居やってるからね。いつも思うのは、観客席と舞台があって、舞台がいい仕事していれば、観客が喜んでくれて、そして劇場の壁が鳴って喜んでくれるということね。劇場っていうのは、僕にとって女性だと思ってるんですよ。劇場自体が生き物なのね。悪い芝居をやっている劇場っていうのは、なん

か壁が冷たくなっていきますね」
劇場と、肌の付き合いをしてきた役者にしか言えない、一種なまめかしい表現である。
「ミス・サイゴンで帝劇に出たとき、最初は、壁が鳴ってくれないわけ。はじめてだから、壁が僕を迎えてくれないんだよね。それが2カ月ぐらいしたら、壁が鳴ってきたの。それから、すごく楽になったのね。そうやって一年半近く、毎日一生懸命やっているうちに、劇場全体でミス・サイゴンのうねり方というのかな、そういうものを感じるようになったんだね」そして今年6月の「お夏狂乱」で、彼は再び帝劇の舞台を踏むことになる。

「前と同じけいこ場なんだけど、量なんか敷いあって、なんか合わねえナアなんて思ってたのね。でも一生懸命けいこをして、舞台に立った瞬間、サイゴンの時の一年半が生きてきて、舞台稽古の初日から、もう壁が鳴ってくれたの。ああ劇場ってこうなんだなああって思ったの。自分が一生懸命やってきた劇場っていうのは壁がちゃんと迎えてくれるんだね。「お帰れ！」って感じて。「待ってたヨ、今度いつ来るんだい？」って感じで…」
そんな彼が、かつてただ一度だけ、NHKの大河ドラマに出演したことがある。ところが当時、舞台に出演予定だった越路吹雪がガンに倒れた

ため、急遽テレビの仕事を取り上げ。穴埋めのための舞台を務めることになった。そしてそのときの作品のうち「エレファントマン」「かもめ」で、彼はゴールデンアロー賞を受賞している。
「やっぱりテレビなんかやるんじゃないって、舞台が引き戻したんだと思うね」
そして、「僕がもし、歌番組に出たり、ホームドラマに出たりしたら、舞台がやきもちを焼くから…（笑）」とニヤリ。
やはりこの人の凄さを、この目で確かめる術は、劇場へ足を運ぶことしかない。

The Real Face

SPECIAL INTERVIEW



© 東宝提供「ミス・サイゴン」より



© '93 シアターアプル公演「キャバレー」より



© 東宝提供「ラ・カージュ・オ・フォール」より



© '93 「ラヴ」より



© 東宝提供「お夏狂乱」より

PROFILE

1949年生まれ。埼玉県川越市出身。

川越商業高等学校卒。舞台芸術学院に入所。卒業後、俳優西村晃の付き人を務めながら演技、バレエなどのレッスンに励む。

1972年 劇団四季「ジーザス・クライスト・スーパースター」の公開オーディションに合格、ヘロデ王役でデビュー。

1974年 四季劇団員として正式入団。以後退団までの18年間、数々のミュージカル、ストレートプレイで活躍。

1975年 「エクウス」に出演、芸術祭大賞受賞。

1980年 「かもめ」「エレファント・マン」の演技で、ゴールデナロー賞演技賞受賞。

1984年 「ユリディス」「エクウス」の演技で、芸術選奨新人賞受賞。

1990年 劇団四季退団。

1991年 「おちも墮ちたり（横澤版・ベニスの商人）」でフリー初主演。

1992～93年 東宝ミュージカル「ミス・サイゴン」にエンジニア役で出演。一年5カ月という記録に残る大ロングランの中で、612回の舞台をこなす。

92年度芸術祭賞、第18回菊田一夫演劇賞菊田一夫演劇大賞受賞。続いて「キャバレー」「ラ・カージュ・オ・フォール」に出演。

1944年 「ラ・カージュ・オ・フォール」「ラヴ」「お夏狂乱」「そして誰もいなくなった」

これからの予定

9月～11月「キャバレー」再演。（9月近鉄劇場）

12月～95年1月「スクルージ」（1月新神戸オリエンタル劇場）